鳥取県青少年育成アドバイザー協議会通信

鳥取県青少年育成アドバイザー通信６１号
鳥取県青少年育成アドバイザー協議会
発行日　2012. 7. 3
編　集　芳村恵子
〒680-0002　鳥取市浜坂東 1-10-15

全日本青少年育成アドバイザー連合会

平成 24 年「第 16 回総会・研究集会」

In　富山

平成 24 年 6 月 9 日～１０日

参加者　70 名　（鳥取より山本・西上・芳村参加）

『いのちのバトンタッチ

～全日本アド連記念講演』

山本　邦彦

去る６月９日、午後の開会行事のあと、映画「おくりびと」の原作者、青木新門先生を講師に迎えて、「いのちのバトンタッチ」～映画おくりびとに寄せて～と題する記念講演を聴いた。

映画をご覧になった小欄読者も多いと思うが、私もテレビで拝見した。私も、主人公の俳優、本木さんの演技・表情に心打たれるものがあった。

講師は５歳で家族５人で満州へ。父が亡くなり８歳で終戦。母と３歳の妹、１歳の弟と逃げたが母がチフスにかかり、隔離された。逃げる途中で１歳の弟が死亡。３歳の妹も亡くなって、自分はどうして良いか分からなかったが、おばさんに近くに焼き場があるからそこに連れてゆけ、と言われ、死んだ妹を背負って焼き場に行き置いて返った。

満州から引き上げるときに、何処からともなく、母が現れて一緒に帰国。自分の生い立ちを紹介しながら、納棺の仕事をするようになり、「汚らわしい」と嫌われ差別された、体験。

居酒屋を開業し、そこに集まる人達が文学青年が多く、紹介されて同人誌に投稿したこと。納棺の仕事についても、日誌をつけていたので、此れを本にしたことなどを紹介しながら、俳優本木さんとの出会いを話された。
その中で、特に強調され私が強く印象に残った言葉がある。

死後３ヶ月位の人が見つかり、警察官と家を訪ねた時のこと。腹からウジが湧き、あたり一面がウジで一杯であり、そのウジが光って見えたことを小説に書いた。
本木さんが写真集を出す時、その小説の一文を拝借したい、との申し出があり、「どこからでも、お好きなところをどうぞ」と了解したら、インドの聖なる河の辺で撮った写真に、この「ウジが光って見えた」という部分を掲載され、本木さんの感性の素晴らしさを感じた、とのこと。

この本木さんが映画化を申しだされ、その経緯を細かく紹介された。その中で、本木さんは葬儀社で５回の納棺作業を体験されて、この主人公の役に挑戦されたとのこと。だからあの演技ができたのかと、私も感心して聴かせていただいた。

その後、原爆の写真展で、少年が死んだ妹（?）を背負って立っている写真を見て、その前で動けなくなったこと。自分の体験を思い出して、体が固まってしまったこと。

青少年の記念講演とか、命の尊さは理解できたが、どう纏められるかなと少し気にしていたら、後半になって神戸の少年殺人事件に触れられた。この少年のお祖母さんが亡くなって、「死んだらどうなるのか」に異常な関心を寄せて、虫やネコなど殺すが、結局友人ともいえる少年を殺すまでエスカレートしてしまった。　（裏面に続く）

この少年の母は、お祖母さんの死んだ所（死の直後の顔）を見せなかった。お祖母さんの死に顔をこの少年が見ていたら、この少年の人生は大きく変わっていたはずであると、強調された。

今日の社会は、頭で考える人ばかりで現場を見ない。「親の死に目に会う」という事は、人間にとって非常に大切な重要なことだと訴えられた。死直後の顔は、ニッコリ微笑んでおられる。誰もが息を引き取る時は「感謝」して死ぬからである。私はだから皆、仏様になれるのだナと納得したものである。

長時間の講演であり、私が感じた心の響きは、この文章ではお伝えできないと思うが、「親の死に目に会う」ことは、人間が避けて通ってはならない一番大切な行動である事は、私も受け止めることができた。かく云う私も母の死に際には会っていない。妻が介護していて、泣きながら「今、お母さんが息を引きとんなった。」との電話を職場で受けて、駆けつけたことを思い出す。

昭和６３年11月29日のことである。以後、朝夕に読経し、平成16年退職後８月に、比叡山延暦寺で得度させていただいたのだが、今までに聴いたことのない、心打たれる記念講演であった。

感謝・感謝・・・合掌

『全日本青少年育成アドバイザー連合会第16回研究集会に参加して』

芳村　恵子

富山で行なわれた、「全日本青少年育成アドバイザー連合会第16回研究集会」に出席した。鹿児島から北海道まで総勢70名の参加者があった。

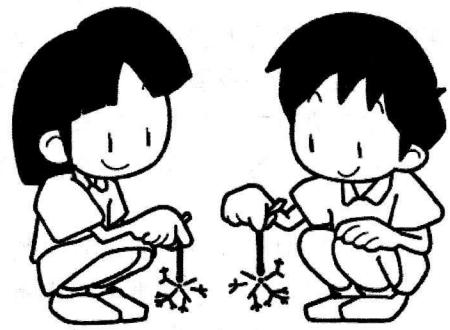
その中で、青木新門さんの『「いのちのバトンタッチ」映画「おくりびと」に寄せて』と題した記念講演があった。「おくりびと」はCM程度で映画も観ていなかった。でも、私達助産師のことを、ジャズシンガーの綾戸智恵さんが、『亡くなった時に「おくりびと」があるのだから、生まれる時に立ち会う助産師は「むかえびと」と言っていい。素敵なむかえびとになってください』と言われたことがあった。私は、お母さんと赤ちゃんが、力を合わせて行なう出産という場面で、良き「むかえびと」になろうと思ったものだ。

青木さんが就職した冠婚葬祭会社での経験を書いた「納棺夫日記」が映画される経緯を、ご自分の人生と俳優本木雅弘さんとの出会いと共にお話された。涙なしでは聴けない壮絶な人生の一齣一齣が胸に沁みた。

私事ではあるが、この日６月９日は私の父の命日でもあった。父の法事はすでに行なっていたので、この会に参加でき、青木さんのお話が聴けたことも良き縁と嬉しかった。

大切な人の臨終に立ち会うことは、亡くなった直後のとってもいい笑顔に接することができる。「葬式に間に合えばいい」ではいけないのだと。そして次の詩で締めくくられた。

人は必ず死ぬのだから
いのちのバトンタッチがあるのです。
死に臨んで先に行く人が
「ありがとう」と言えば、
残る人が
「ありがとう」と応える。
そんなバトンタッチがあるのです。
死から目を背けている人は、
見損なうかも知れませんが、
目と目の交わる一瞬の
いのちのバトンタッチがあるのです。



父は、病気療養中に小林正観氏の「そわかの法則」を読んだ後、「ありがとう」を大学ノートに何冊も書き綴っていた。病気と正面から向き合い、見習いたいような最期だった。

（次ページに続く）

最後のノートの残りのページに、私達家族だけでなく親戚皆が、父へのありがとうの想いを書き、お棺に入れた。

そして、家族に看取られながらの幸せな臨終をずっと傍で経験した14歳の男の子と、「神戸連続児童殺傷事件の酒鬼薔薇聖斗」と名乗る「少年A」の、祖母の死との関わりの違いを比べて、生まれること・その命を大切に生きること・そして死も忌み嫌うのでなく、当たり前のこととして考えなければならないと話された。

今は、生と死が当たり前に繋がっていることを経験し辛くなっている。そのためか、簡単に人を殺傷する事件が毎日のように報道されている。

以前購入して読んだ『「少年 A」この子を生んで・・・』という少年Aの父と母の悔恨の手記をもう一度読んだ。胸が痛んだ。父の想い、母の想い、少年Aの言動も然る事ながら、両親の育児に対する考えや実際の子育て方法の記述一つ一つを、親としての自分の育児に重ねながら読んだ。誰しも殺人者に育てようとする親はいないはずである。でも、過ぎてしまった時の結果として、子どもが殺人者になった親の哀しみは、計り知れないものがあるだろう。

先日、ラジオを聴いていて「子どもは5歳です。おばあさんのお葬式があったのですが、後々精神的に悪いと思って連れて行きませんでした。どう思われますか」という質問が電話相談に寄せられていた。

5歳ならば、大切な人を亡くした哀しみや、亡くなった人をおくるということがどんなことかを心に刻めるいい体験ができたろうにと思いながら聴いた。

いろんな場面で、当たり前のことが当たり前でなくなっていることが多いように思った。

「少年 A」は頭だけで「死とは何か」と考え続けた挙句、他の要素も加わって犯行がエスカレートし続けた。

現実よりバーチャルな世界に容易に浸れる現在の若者に、もっともっと体験から学ぶことができる環境をつくらなければならないのではないかと考える。

その為には、子育てに関わる大人が学び合う環境作りも、私達青少年に関わる者の活動ではないだろうか。

「ありがとう」の写真展

山本　邦彦

９・１０の２日間、富山市で開催された全日本青少年育成アドバイザー連合会「第１６回総会・研究集会」に参加。８日朝、日交バスで新大阪へ、少し待って特急サンダーバード号で富山へ。
ホテルに着くと、神戸の仲間「ひまわりおじさん」こと荒井さんが玄関でタクシーを降りると待っていたように出迎えてくれた。富山の女傑、早坂さんも続いて姿を表して、玄関ロビーへ入ると直ぐに「ありがとう」の写真展に案内してくれた。

趣意書には、この写真展は石巻高校に通うごく普通の女子高校生が撮った写真を展示したものです。

当日、本人達は授業中の校舎が２m程津波に浸かり、学校はそのまま避難所に変わり、家に帰ることさえできませんでした。多くの人に支えられて今日に至りました。支援をしてくれた人達に「ありがとう」の言葉を届けたい。

そんな思いを被災地で写し撮ったのがこの写真です。写真の反対側にはカメラを構える笑顔の女子高生がいて、写真自体を優しくしています。・・・「支援をありがとう」と言っている表情だけを写し撮った写真展は稀です。ボランティアに感謝のメッセージを贈っています。来場して高校生の気持ちを受け取ってください。と記してある。

企画・撮影した石巻好文館高校ＪＲＣの思いとして・・・

（裏面に続く）

大きな被害を受けましたが、私達でもできるボランティアがあるのではないかと考えて、企画したのが「ありがとう」の笑顔の写真展です。

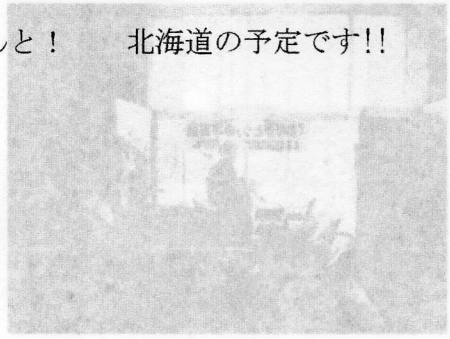
全国から「元気・勇気・そして笑顔」を戴きました。今度は私達の方から「ありがとう」の感謝を込めた笑顔のお返しをしたいと思い写真に収めました、とのこと。

＜お知らせです＞

全日本青少年育成アドバイザー連合会

平成25年度総会は、

なんと！　北海道の予定です!!



編集後記

今年の梅雨は、土砂降りになったりカラカラ天気になったりと、変わりやすいですね。

半年振りの「お久しぶり通信」になりましたが、皆さんお元気でお過ごしでしょうか。

原子力発電のことや震災後の遅々として進まない復興、そしてなんかはっきりしない政治情勢など、モヤモヤしたニュースが一杯です。

何とか、明るく笑顔で過ごしたいものですね。

oine.oine.oinechan@fork.ocn.ne.jp
(word で入れてください